埋蔵文化財愛知

no.51

桶組井戸断面

桶組井戸

戦国時代・近世屋敷地

郷上（ごうがみ）遺跡の井戸

郷上遺跡では戦国時代から近世前半にかけての集落の遺構が展開しており、溝により方形に区画された屋敷地から井戸が多数検出されている。近世の時期の井戸は桶を数段重ねて井筒とする構造であり、井筒の内部上半に礫が詰まっている状態のものが数例ある。井戸の廃絶儀礼と考えられる（Ⅲ頁参照）。

遺跡調査速報

苅安賀遺跡（かりやすか）

一宮市大和町苅安賀
(財)愛知県埋蔵文化財センター

苅安賀遺跡の発掘調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として平成８年度分について4989㎡、本年度分について1732㎡を10月上旬に完了した。苅安賀遺跡の遺構・遺物はそのほぼ８割が戦国時代末から江戸時代に属している。それ以前では、弥生時代、古墳時代、鎌倉時代などの時期に属すものがわずかずつある。戦国時代末から江戸時代に属す資料は、苅安賀城につながる16世紀後半から17世紀前半にかけて、そして宿場町に関係する１８世紀以降に属すものとにおおきく２分できる。

注目すべき苅安賀城関連では、東辺を画す河川、北辺を画す外堀（造り替えによって２条めぐる可能性がある）、寺域に関連する方形区画、虎口をなすと推定される区画など、いくつかの成果を得ることができた。しかし、城の中枢部ではなかったこと、加えて後世の削平のために、残念ながら遺構・遺物の遺存状況は決して良くなかった。１８世紀以降では町割りこそ明確ではなかったものの、造り替えの顕著な井戸群、塀（土塀？）の基礎部分、廃棄土坑などを検出した。

（埋文セ　黒田哲生・浅井厚視）

97C区発掘状況

97D区発掘状況

大木之本遺跡（おおきのもと）

東海市養父町
東海市教育委員会

東海市養父町に所在する大木之本遺跡は、市域の海岸平地に認められる３列の砂堆のうち、最も海岸よりの砂堆上に位置する。昭和６３年度には、都市計画道路工事に伴う発掘調査を実施しており、今回の調査地点はその北側に位置する。

今回の調査では、古墳時代前期、奈良・平安時代の住居跡・土坑、中世の溝・土坑（井戸？）等を検出しており、それらに伴って多量の土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶椀・山皿等を検出した。古墳時代前期（廻間Ⅰ式）の住居跡からは、ほぼ完形の壺・高坏・台付甕が床面直上でまとまって出土しており、特筆される。奈良・平安時代（ＮＮ－32・Ｏ－10）の住居跡は９軒確認している。砂堆上の遺跡としては珍しく遺存状態が良好で、かまども袖部が比較的良好な状態で確認できた。

また、少量ではあるが弥生時代前期の条痕文系土器が、包含層及び土坑内から出土しているほか、下呂石の石鏃、黒曜石のフレイク等も出土しており、今回の調査地点近隣に同時期の集落跡が存在する可能性が高い。

（東海市教育委員会　永井伸明）

古墳時代前期遺物出土状況

古代住居址かまど検出状況

郷上（ごうがみ）遺跡

豊田市鴛鴨町
(財)愛知県埋蔵文化財センター

郷上遺跡は矢作川右岸の沖積低地に位置し、矢作川の形成した自然堤防上に立地する。周辺は平坦な地形で、整然と区画された水田が広がる環境である。標高は約２０ｍを測る。遺跡は、鴛鴨の集落のある北西側の洪積台地の縁に少し離れて沿う形で北東から南西方向に延びる。南東側は沖積低地を隔てて矢作川に臨む。

今回の調査は、第二東海自動車道（第二東名）建設工事に伴うものである。昨年度に試掘調査を行い、今年、本調査を開始した。今年度の調査予定面積は20350㎡である。

これまでの出土遺物は古墳時代から明治時代までに及ぶが、中心になるのは古墳時代後半、奈良時代から平安時代初頭、及び中世から江戸時代前半の三時期である。

古墳時代の主な遺構としては、調査区域北半で北東から南西に走る幅約９ｍ深さ約２ｍの５世紀代の大溝が検出された。出土遺物は少ないが、埋土上部より古代の瓦塔片が出土した。

古代では、平安時代初頭の竪穴住居跡等が検出された。以後の時代の削平が著しいため遺存状態が悪く、竈等は明確に確認できない状態であるが、比較的遺物の残りのよいものでは灰釉陶器、須恵器、土師器等がまとまって出土した。また、少数ではあるが、製塩土器の脚部が出土している。その他、竪穴住居の集落とは時期の異なる、ほぼ南北に延びる溝が検出されたが、自然地形の制約に影響されておらず、条里制による規制が認められる。

戦国時代・近世では、１８世紀まで存続した旧鴛鴨村集落に関連する遺構が調査区全域に展開している。遺構は耕地整理以前の土地区画に沿った形で検出されており、溝に囲まれた方形の屋敷地内に多数の掘建柱建物の柱穴、井戸が検出されている。溝の埋土中からは多量の土師器鍋及び比較的少量の陶器類が出土している。木製品としては、下駄、羽子板、漆椀などが出土し、柱穴内には柱根の遺存しているものがある。集落は中世に形成され、この時期に最盛期を迎えるが、１８世紀の後半以後の遺構は激減する。この地域の集落が、１８世紀に頻発した矢作川の洪水を契機として台地上に移動したことが文献資料等から言われており、遺構の状況からもこのことが裏付けられる。戦国時代・近世の農村集落の考古学的な資料は少なく、今後文献史料等とも照らし合わせて問題を追究していく必要がある。

（埋文セ　酒井俊彦）

戦国時代　屋敷地溝群

戦国時代　遺物・杭列出土状況

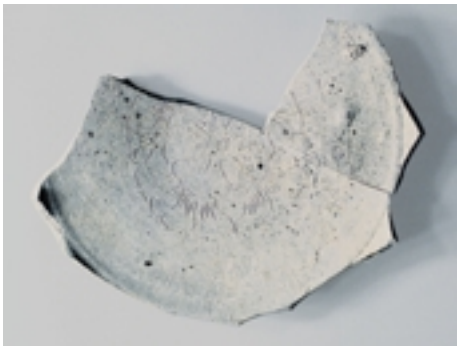
近世　柱根出土状況

古代　遺物出土状況

緑釉陶器生産窯

椀（大毛池田遺跡）

合子（田所遺跡）



椀素地（黒笹89号窯）

猿投窯鳴海地区

熊ノ前第１地区	名古屋市	２類
熊ノ前第４地区	名古屋市	２類
亀ケ洞１号窯	名古屋市	２類
亀ケ洞４号窯	名古屋市	２類
鳴海78号窯	名古屋市	３類
鳴海82号窯	名古屋市	１類

猿投窯そのほか

東山72号窯	名古屋市	３類
鴻ノ巣窯	名古屋市	３類
桟敷１号窯	豊明市	３類
岩崎24号窯	日進市	１類
海老池１号窯	日進市	３類
黒笹１号窯	三好町	３類
黒笹５号窯	三好町	３類
黒笹14号窯	三好町	３類
黒笹30号窯	三好町	３類
黒笹89号窯	三好町	３類
黒笹90号窯	三好町	３類
黒笹30号窯	三好町	３類
黒笹 116号窯	三好町	３類

尾北窯

篠岡４号窯	小牧市	１類
篠岡５号窯	小牧市	１類
篠岡47号窯	小牧市	３類
篠岡48号窯	小牧市	１類
篠岡81号窯	小牧市	１類
篠岡 100号窯	小牧市	３類
高窯根	小牧市	３類

東濃窯

北丘15号窯	多治見市	１類
北丘26号窯	多治見市	１類
大原９号窯	多治見市	１類
住吉１号窯	多治見市	１類
大針１号窯	多治見市	３類
大針３号窯	多治見市	３類
大針４号窯	多治見市	１類
虎渓山１号窯	多治見市	３類
白土原２号窯	多治見市	１類
永田１号窯	恵那市	１類
亀ケ沢２号窯	恵那市	１類

二川窯

苗畑１号窯	豊橋市	１類
苗畑５・６号窯	豊橋市	１類
大沢Ａ－２号窯	豊橋市	１類

平安時代、特定階層のみが使用できた特殊な陶器が存在した。緑釉陶器である。

ここで言う緑釉陶器とは、奈良三彩の系譜を引くもので平安時代に緑釉単彩となった鉛釉陶器を指す。緑釉陶器は特殊品ではあるが、近年の大規模調査により出土量も増加し、平安時代に属する集落遺跡の調査では、大抵数点の出土が望めることも判明してきた。

今日、緑釉陶器の生産地は京都系、近江系、長門系、東海系に大別することができる。今回注目するのはこの中で東海系とされる一群である。

現在、報告されている東海系緑釉陶器の生産窯は約40基にのぼる。時期的には9世紀後半～10世紀前半に主体を考えることができる。分布状況は猿投窯が最も濃く、特に鳴海地区に集中をみることができる。猿投窯ではこのほかに黒笹地区で7基報告されている。また、猿投窯と庄内川を挟んだ対岸の尾北窯にも7基と、まとまりを確認することができる。一方、東濃窯では多治見市にそのまとまりが確認できる。この他にも恵那市に2基知られている。また、二川窯でもその存在が確認されたことは記憶に新しい。

ところで東海系の緑釉陶器の生産は、大きく三つのパターンが考えられる。前者は、灰釉陶器窯を使用している事例である。いずれの報告例も通常の灰釉陶器窯をそのまま使用しており、緑釉陶器併焼窯としての独自の特徴は確認できない。また、緑釉陶器の生産量は少ないようで、灰釉陶器を主体とした生産を実施している。これを東海系1類と仮称する。

もう一つの類型は、現状では猿投窯鳴海地区の一部でのみ確認されている。窯体構造に特徴的な一群である。このうち、熊ノ前第一地区A窯と同第二地区A、B窯は報告書が刊行され、その構造が比較的明らかにされている（増子他　1984）。検出された窯体は、平坦な焼土面である。いずれも耕作などにより大半が消滅した状態で検出されたため、その構造は不明な部分が多いが、平面形が小判形で溝に囲まれた構造が想定されている（前川　1989）。また、熊ノ前第一、二地区に近接する亀ケ洞1号窯でも、平坦な焼土面が二ケ所存在したとされ、同様の構造であったことが予想できる。なお、後者の生産内容は、緑釉陶器を主体としたものであったことが考えられる。これを東海系2類と仮称する。

最後の東海系3類は、素地のみの生産例である。灰釉陶器窯で生産されるなど、内容は東海系1類と同一。ただし釉薬は確認できない。つまり、ここでは緑釉陶器の完成品が認められないのである。なお、3類は緑釉が確認できないという消極的理由で設定しているためこのうちいくつかは本来は1類であるという可能性を持っている。

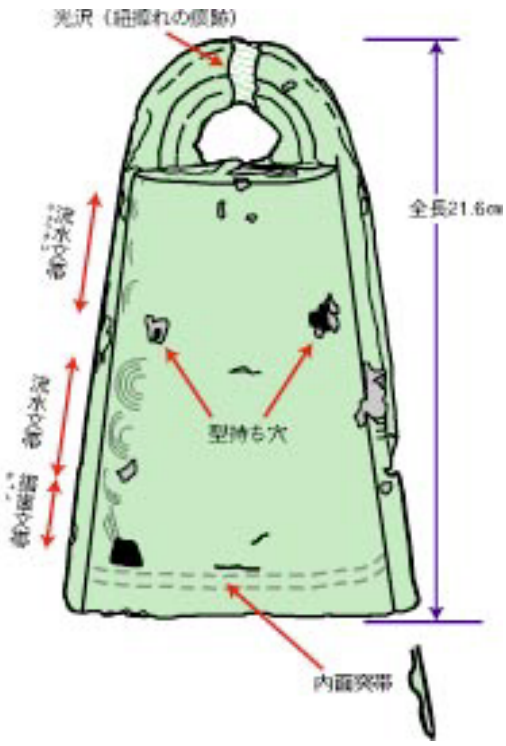
次にこうした素地について考えたい。この一群は、胎土が密な精製品で、素地土の製作には水簸などの工程も含まれていたことが考えられる。整形の工程では、ヘラミガキの手法を施され、時に陰刻花文を刻んだりする。また、焼成時には、サヤなどの窯道具も使用して、自然釉の付着を極力防止するなど、よく管理された製作工程を考えることができる。これらは無釉のまま集落遺跡から出土する事例も知られており、その全てが緑釉陶器の素地用ではないにしろ、釉薬を除けば緑釉陶器の特色そのものであるため、多くは緑釉陶器の半製品と考えることができる。そしてこれらは、特に東海系2類の生産地の下請け的な性格を持っていたと考えておく（高橋　1995）。1類は生産量の関係から半製品を自給していると考えられるからである。なお、緑彩文陶器（井上　1992）と呼称される一群の生産が、東海系では2類のみで確認されているにすぎないことも示唆的である。一方では、優れた製品を生産した黒笹地区の米ケ廻間一帯の諸窯が東海系3類の生産体制をとっていることも重要と考えられる。つまり緑釉陶器の生産は、非常に分業的なあり方を考えることができるのである。こうした生産構造と、これを可能とした背景の存在が、この時代における当地域の窯業の特色と考えられるのかもしれない。

（埋文セ　池本正明）

参考・引用文献

井上喜久男　1992　『尾張陶器』
高橋照彦　1995　「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」『国立歴史民俗博物館研究報告』57
前川　要　1989　「平安時代における緑釉陶器の編年研究」『古代文化』41-5
増子康真他　1984　『名古屋市熊ノ前古窯址群』名古屋考古学会猿投窯鳴海地区

八王子銅鐸一般公開！



昨年度の調査で発見された八王子銅鐸を、奈良国立文化財研究所に保存処理及びクリーニングを依頼していたところ、検出状態では確認されなかった事実が多数発見されました。

●発見その１　ヒモ擦れの痕跡

鈕の部分に縦方向の光沢とその上下に若干のくぼみが残っていることが判明しました。また、内面突帯もひどく磨り減っており、打ち鳴らして使用していたことが推測されます。

●発見その２　文様の発見

発掘現場や取り上げた直後では確認できなかった文様が、クリーニングをすることによって確認されました。文様は流水文とよばれるもので、その形態からもっとも古いタイプのものである可能性が指摘されました。

●発見その３　鋳造時期の確定

銅鐸の型式は、ＢＣ２世紀頃に製作された付鈕１式であることが判明しました。

このほか、保存状態が極めて良好であることから、今後各種の分析によって明らかにされる事柄を多く持ち合わせている銅鐸であることがわかりました（詳細は次号参照）。

なお、愛知県埋蔵文化財センターでは、11月７日(金)に記者発表を行い、続いて11月10日(月)から11月28日(金)までの３週間、センター２階の資料管理閲覧室にて銅鐸の一般公開を実施しました。連日多くの人々が訪れ、期間中230名の方々が来訪されました。

平成9年度発掘調査技術等研修会

主催　愛知県教育委員会・愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センターにおいて市町村埋蔵文化財担当者を中心に、発掘調査技術等研修会が開催されました（研修会Ⅰ　８月21日・22日 ／ 研修会Ⅱ 11月20日・21日）。

加藤允彦氏ご講演風景

埋蔵文化財愛知　　no.51
発行　平成10年１月９日
編集　財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
〒498 愛知県海部郡弥富町前ケ須新田字野方802-24
TEL 0567-67-4161～4163　FAX 0567-67-3054
印刷　クイックス